

「希望の復活」

ちょっと変なたとえ話から始めます。もしも、自分の大好きな、大切な愛する人が「近いうちに死んでしまう」と言われたとします。もちろん、そんなことを言われても「そんなバカな」と思うでしょう。何の根拠があってと反論したくなります。さらに加えて、「あなたの大切な人は、死んだ後、あなたとの思い出深い、あの場所に現れます」と言われたら、もういい加減にしろと、突っ撥ねてしまうかも知れません。縁起でもない、非常に失礼なお話です。と言いますか、不気味過ぎて関わりたくもありません。でも、もしも、そんな風に愛する人の死を言い渡されて、さらに、愛する人の復活と言うか、再来を予告された後、本当に、愛する人が死んでしまったなら、私たちは、その予告を無視できるでしょうか？ 突然、愛する人を失い、伝えなかったこと、言い残したこと、してあげなかったこと、許して欲しいこと、許してあげたいこと、様々な後悔や願望が渦巻いているであろう、その死別悲嘆の時に、「あなたの大切な人は、あなたとの思い出深い、あの場所に現れます」という荒唐無稽な戯言は、どう響いてくるのでしょうか。

死者の復活や再来なんて、あり得ない、馬鹿馬鹿しい、非常識だ、と思いながら、でも、「もしかしたら」という思いが芽生えるのではないかと私は自分のこととして想像します。皆さまは、どうでしょうか。まあ、可笑しなたとえ話なので、真面目に考えるまでもないかも知れません。でも、多分、私たちは愛する者の死に際して、今考えている程には、冷静でも理性的でもいられないと思います。死に分かれた悲しみに暮れる中、「あなたの大切な人は、死んだ後、またあの場所に現れます」という言葉は、励ましなのか呪いなのか、よく分かりませんが、きっと、「確かめずにはいられない」という衝動を掻き立てるものです。もちろん、「絶対に現れる」と確信できる程ではあ

りません。「もしかしたら」「あり得ないけど」という言い訳がくっ付いてくると思います。でも、きっと確かめたくになります。期待してないけど、そんな変なことを信じてはいないけど、ただ、確かめてみないと、諦めることもできない。そんな心境になるんじゃないか、と私は想像します。

と言うような、変なたとえ話をしたのは、今日の聖書箇所が登場する2人のマリアさんが、まさに、そういう心境だったのではないか、と思ったからです。この2人のマリアさんは、「もしかしたら」「あり得ないけど」でも、確かめずにはいられなくて、イエス様のお墓に向かったのだと、私は考えます。ちょっと話は遡って、マタイによる福音書16章21節から22節を読みます。

「このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」。これは、イエス様が、御自分の十字架上での死と、その後の復活を予告している箇所になります。イエス様は、そういう風に事前に「死と復活」を告げていたんですね。しかし、このイエス様の発言に対する、周囲の反応は、この時のペトロさんの物言いに如実に表れています。ペトロさんと言うのは、イエス様の一番弟子のことです。ペトロさんは、御自分の「死と復活」を告げられたイエス様に向かって、「とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」と言って、諫めたのだと書かれています。「諫める」とは、「目上の人に対して、間違いや良くない点を改めるよう忠告すること」です。ペトロさんは、イエス様に向かって、「そんなことを言うのは間違っている」と指摘したわけです。このペトロさんは指摘あるいは考え方と言うのは、その当時の、弟子たち全員、民衆全員の共通理解であったかと想像します。十字架という大事が起こる前、誰もイエス様の「死と復活」の予告を、真に受けようとはしなかったのです。そんな愚かな、馬鹿なことが起こるなんて、あり得ないと考えられていました。

しかし、神様の導かれる現実には、弟子たちや民衆が思い描く程に優しくはありませんでした。イエス様は、本当に「長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され」てしまったのです。十字架という処刑方法で、磔にされ死なれたのです。それは、イエス様のことを陰ながら慕い続けていた弟子たちや、一部の民衆にとって、大きな悲しみであったことは間違いありません。・・・と同時に、ようやく、イエス様の死と向き合うことで、きっと、かつてのイエス様の御言葉が、脳裏に過ったのではないかと思います。すなわち「三日目に復活することになっている」という御言葉が、残響のように耳に聴こえてきたんじゃないか、と。その御言葉を告げられた直後は、「とんでもないことです」と思われたけれど、いざ実際に、イエス様の死に向きあった今、きっとその御言葉の真実を確かめずにはいられない、と言うのが、信仰者の性であるかと思います。きっと2人のマリアさんも、「もしかしたら」「あり得ないけど」「そんな変なことを信じているわけではいけれど」でも、確かめずにはいられなかったのではないのでしょうか。諦めるにしたって、その御言葉は実現したのか、やはり嘘だったのか、はっきり知るまでは諦め切れない、そんな心境だったのだらうと想像します。

そもそも、大切な人が亡くなってすぐに、お墓参りに行くというのは不思議な話なのです。多くの場合、大切な人が亡くなったら、動く気力もなく、家に籠り、ただ、その悲しみと向き合い、その悲しみが薄まっていくことを待ち続けるものです。お墓に行くという行為は、その死を十分に受け入れ、理解した後の行いです。だから、この2人のマリアさんが、イエス様のお墓に行った動機は、弔いという気持ちではなかったと思います。2人のマリアさんは、イエス様を弔うためにお墓に行ったのではなく、生前のイエス様の御言葉を確かめに、大きな疑いとわずかな希望を携えて、お墓に向かったのです。

ただし、常識的な見地から言えば、このお墓参りは、十中八九、絶望に終わることが見えていま

した。冒頭の変なたとえ話で、私が言ったように「あなたの大切な人は、あなたとの思い出深い、あの場所に現れます」と言われて、実際にその場所を訪ねてみるにしても、本当に出会える可能性は全くありません。それは、訪ねる前から分かり切っていることです。この2人のマリアさんも、喜び勇んでお墓に向かったのではなく、どちらかと言えば、「予想通りの絶望を目の当たりして、すっぱり諦めるために」、お墓に行ったんじゃないかと私は思います。そこに信仰的確信や、御言葉への全幅の信頼などは、無かったと思います。ただ、諦めるにしたって、確かめてみないと、諦め切れないから、見に行った。そういう消極的な動機だったかと私は考えます。

でも、そういう消極的な動機で見に行ったイエス様のお墓の前で、この2人のマリアさんは、「あり得ない奇跡」を目撃するわけです。そして、その帰り道に、「あり得ない再会」を経験するわけです。私が思うに、イースターの素晴らしさと言うのは、この2人のマリアさんに起こった「あり得ないこと」の中に集約されていると言えます。つまり、「諦めざるを得ない、絶対に諦めることになる、そんな覚悟を必要とする場所でこそ、希望の復活を目の当たりにした」ということです。往々にして神様の御業って、そういうものなんだろうなあ、と思います。このような神様の御業について、色々な表現の仕方ができますが、例えば「神様の御業とは絶望の中でこそ働かれる」と言うことができます。人の目から見れば希望も救いもない状況で、実は神様の御計画は進んでいるのだ、祝福が備えられているのだ、と。あるいは、「自分の中の希望を捨て去った後に、本当の希望が与えられる」とも言えます。希望とは本来、自分の手で持ったり、懐に抱いたりするものではなくて、天に蓄えられているものです。だから、本当の希望を見出すためには、まず自分の中にある拘りや執着を手放さないといけません。積極的に希望を握りしめて取り組むよりも、この2人のマリアさんのように、ダメで元々かも知れないけど、でも、主の御言葉に従ってみようと、という弱々しくも御言葉にすがろうとする姿勢が、却って神様の御心には適い、あり得ないほどの希望へと繋

がるのかも知れません。

と言うような、イースターの出来事は、2000年前のイエス様の御復活で完結したわけではありません。この御復活という出来事は、神様とイエス様が示された消えることのない「希望」の、輝かしい序幕、喜ばしい福音の始まりであります。私たちは、イエス様の御復活という出来事を通して、諦めようとする時にこそ与えられる解決策や、もうダメだと思える時にこそ見出す励ましや、死んでしまいたいと思いつめる時にこそ得られる救いがある、ということ、を、教えられるのです。「死さえも克服し、喜びに変える神様なんだから、どんなことがあっても、まあ、なんとかなるだろう」という単純だけれども、かなり力強い信仰を、イースターの今日、私たちは神様とイエス様から頂くのです。

クリスチャンであれ、ノンクリスチャンであれ、イエス様の御言葉を信じ切れなくても構いません。神様の御心を疑い続けていても大丈夫です。ただ、「もしかしたら」「あり得ないけど」「でも、確かめみたい」という衝動と願望が、いつか確かな信仰に繋がっていきます。この2人のマリアさんのように、恐る恐るお墓に向かって歩いていったように。行った先には、やっぱり絶望しかない、やっぱり嘘だった、やっぱり希望なんて見当たらない、そういう全然甘くない現実が待っているだけかも知れない。しかし、そんな恐れを抱えつつも、一歩を踏み出し、しっかりと目を向けてみる。絶望を覚悟した上で、希望を見るために手を伸ばしてみる。そういう、ちょっとだけ勇気のある姿勢が、思いも寄らない喜びと祝福に繋がるんだ、ということ、を、イースターの今日、私たちは心に留めていたいと思います。お祈りを致します。

神様。

今日、私たちはイエス様の御復活を喜ぶ、イースターの礼拝を守っています。今日改めて、主の御復活の場面を読み返し、そこには必ずしも確固たる信仰や確信があったわけではない、という事実を知ることができました。その初めから、今に至るまで、やっぱり「人が蘇る」ということは、人間には理解の難しい、神様の御業なのだと思います。しかし、私たちが疑おうが疑うまいが、また、強く確信しようが確信しまいが、あなたは、御心のままに奇跡を起こし、素晴らしい祝福と恵みを示してください。イースターとは、クリスマスと同様、あなたからの一方的な愛と慈しみが実現した日なのだと思います。どうか、信仰弱く、信じ抜くことを成し得ない私たち一人ひとりを顧みてください。信じた後に裏切られることを恐れ、あなたの素晴らしい福音を前に思い留まる私たちがいます。諦めるしかない未来を見たくなくて、最初から期待さえしない私たちがいます。どうか、そんな私たちのために、確かな希望があることを示してください。恐る恐る御言葉に耳を傾ける私たちに、恐る恐る空のお墓を覗き込もうと勇気を出す私たちに、どうかあなたが応えてください。

このお祈りを、復活の主であるイエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。